



設置が完了した津波避難誘導標識(黒潮町入野)

町によると、南海トラフ巨大地震による34メートルという最大津波高の想定を受けて、2012年度から避難場所や避難道の整備をスタート。このうち、避難道はおよそ8割の整備が完了し、避難誘導の標識を今年7月からの設置してきた。避難場所までの距離や方向を示した誘導標識を電柱やガードレールの柱など10カ所に取付けたほか、神社などの1次避難場所13カ所、津波避難タワー6

【幡多】幡多郡黒潮町は23日までに、町内899カ所で計画していた津波避難のための誘導標識計1057枚の設置を完了した。主に電柱などに掲げており、住民らは「避難場所への経路が一目で分かるようになって助かる」と喜んでいる。(山崎友裕)

# 黒潮町 津波避難標識1057枚 経路一目で899カ所に設置完了

カ所、福祉施設など2次避難所19カ所には、それぞれ標高や場所名を記したものを設置。いずれも日本語と英語で表記しており、夜間でも見える素材を使用しているという。町情報防災課によると、誘導標識は道を間違えやすい交差点などに多く設置しているといい、「地域住民だけでなく、観光客にも分かりやすいように工夫した」。子どもたちにも親しみを持ってもらえる

洋画「刻」大崎安夫(津野町)



写真「移ろい」(カラ辻慶二(緑町))



グラフィックデザイナー「四季の国日本」西紀彦(高知市)



小野恵莉子さん(中央左)と共々に氷を取り、大喜びの子どもたち(四万十市の具同小)

【幡多】海上自衛隊「せ」の料理人として、南極観測船「しら」先月まで任務に当たった四万十市の具同小の観測船員母校に提供

よう、やなせたかしさんがデザインした防災キャラクターも登場している。同町入野の永野正彦さんは「地元の人第、標識の設置を順次でも土地勘のないとこ進める予定だという。

「地元の子もたちに南極のことを知ってもらいたい」との思いから、小野さんが具同小に呼び掛けて訪問が実現。6年生82人に航海映像を見せながら「曜日感覚を忘れないために金曜日にはカレーを食べます」「南極大陸は日本の約37倍ある」と活動内容や南極の様子を説明した。その後、数万年前の空気が閉じ込められた南極の氷約8キロを、細かく砕いた小野恵莉子海士長(25)が四万十市出身の母の具同小(同市具同)を訪れ、南極から持ち帰った氷を児童にプレゼントした。小野さんは中村高校を卒業後、海上自衛隊に入隊。昨年11月から今年4月まで「しら」に乗船し、料理人として活動していた。「先輩に人がおる自分たちに挑戦した。子どもたちと笑った。」と笑

【窪川】域の環境授業が23日、大